

「初期」ルーマン研究の意義

三谷 武司（大学院情報学環准教授）

1. はじめに

20世紀後半を通じ、社会学における理論研究の相対的な重要性は低下していった。この時期における社会学の発展は、方法の整備と並行して進展する研究対象開拓の過程だったと言えるだろう。実際、「〇〇（の）社会学」といった名称の研究分野とそれをタイトルに掲げる出版物が急増する一方、それら膨大な研究蓄積の分野としての同一性は統一的な理論によってではなく、「社会的」と形容されうる方法群の緩やかなまとまりによってかろうじて保たれてきた。

そうした状況に対し、ドイツの理論社会学者ニクラス・ルーマン（1927-1998）は、主著の一つ『社会的システム』（1984）の冒頭で「社会学は理論の危機にある」と断じ、一般システム理論の社会学分野への応用による普遍的な社会学理論の構築を、改めて自らの課題として掲げた。そして実際、各種冠社会学のあらゆる対象領域における知見をルーマン理論の用語系に落としこんでいく作業を晩年まで続け

た。その主たる成果が、先の『社会的システム』を「序論」とし、著者の死後も遺稿をもとに刊行が継続された『社会の理論』シリーズ——『社会の経済』（1988）、『社会の科学』（1990）、『社会の法』（1993）、『社会の芸術』（1995）、『社会の社会』（1997）、『社会の政治』（2000）、『社会の宗教』（2000）、『社会の教育システム』（2002）——である。

この結果、全体としては縮小傾向にある理論社会学の内部において、しかしルーマン学説研究の重要性は増大することになる。日本でも、理論的志向をもつ研究者の多くがルーマンに取り組んでいる。しかしルーマンは異常な多作家で、著書だけで約80点、論文が約400点を数え、しかも遺稿を編集した著書が現在でも毎年のように刊行されていることから、なかなか学説研究上の処理が追いつかないというのが現状である。

2. ルーマン学説研究の現状

日本は世界的に見てもルーマン研究が活発で、例えば英語圏とくらべてもはるかに先んじていると言える。著書の大半について邦訳が刊行されており、昨年末にも私が共訳者として携わった『社会構造とゼマンティック3』（法政大学出版社）が出た。また本稿執筆と時を同じくして、ルーマン理論全体の中に彼の法理論を位置づけて論じる毛利康俊『社会の音響学——ルーマン派システム論から法現象を見る』（勁草書房）が届いたところだ。邦訳や研究書・研究論文の刊行は今後も継続するだろう。

にもかかわらず、ルーマンが社会学における理論研究の相対的な地位向上に役立っているようには見えず、どちらかという経験的研究から遊離した理論的自己満足の象徴のように捉えられることが多いのも事実である。これは学説研究の立場からすると、近年の社会学における過剰な理論軽視傾向にも原因の一端があると言いたくなる反面、ルーマン学説研究の側にアピールが足りない部分があるのではないかと感じる。

私は、ちょうどルーマンが逝去したのと同じ1998年に本郷の社会学研究室に進学した。駒場での第二外国語はフランス語で、当時ドイツ語はまったくできなかったため、とりあえず英訳と邦訳を手がかりにルーマンを読み始めたのだが、すぐに、自分がルーマンのテキストに見出す魅力と、ルーマン研究において取り上げられている論点との大きな齟齬に気付かされることになった。この懸隔は現在でも解消されておらず、それが私自身のルーマン研究を牽引する

大きな動機の一つとなっていると同時に、それこそが学説研究の外部に対するアピール不足の原因の一つだと私は考えている。

1980年代前半に「オートポイエーシス」概念を導入して以後、ルーマンは理論的語彙の整備を急速に進め、従来すでに異常だった多作傾向にさらに拍車がかかることになるのだが、その基本的な骨格を最も一般的な水準でまとめるなら次の3点になろう。

(1) 社会的システムの要素はコミュニケーションであり、瞬間的に生成消滅する出来事としてのコミュニケーションの不断の接続こそが社会的システムの存続を意味する。

(2) コミュニケーションは、それに関与する人間有機体、心や意識、神経生理学的なプロセスから自立した、一種独自の秩序を形成している。

(3) 個々のコミュニケーションの接続可能性に限定を与えるのが社会的システムであり、この接続可能性の限定のされ方によって社会的システムの分類がなされる。

このような理論構想は、例えば「同一性から差異へ」とか「主体の死」といったポストモダンの標語と折り合いが良く、実際ルーマン自身がその種の言い方をしていることもあって、そうしたテキストに親和性を感じる論者の間で歓迎されてきた。だが結局のところ、これもやはり複数ありうる理論構築の可能性の一つにすぎず、共通の理論的課題設定が失効して実証主義的な空気が支配的な現在の社会学界においては、実質的に論者の「趣味」の問題に還元され

てしまっている。

3. 「初期」ルーマンに見出される問題意識

これに対し私が魅力を感じるのは、ルーマンが様々な試行錯誤を繰り返していた1960年代の「初期」テキスト群である。この時期は理論的語彙が未整備であるがゆえに、理論構築を通じて彼が解決しようとしていた課題、すなわち社会学の現状に対してルーマンが感じていた問題点がかなり率直に、また相応の分量を割いて表明されているからだ。例えば1967年の論文「社会学的啓蒙」は実証主義社会学を「暴露啓蒙」と名指し、その限界を超えるものとして等価機能分析を用いた社会学的研究＝社会学的啓蒙を対置する。あるいは1966年の著書『行政学の理論』では、社会科学における経験的研究と規範的研究の断絶状況を克服し、両者を架橋して協働連関を構築することに機能主義的システム理論が貢献しうる旨が積極的に主張されている。いずれも、1980年代以降の「後期」テキスト群では影を潜める主題であり、したがって「後期」中心の従来のルーマン研究では重視されていない。

しかしこうした目標設定は、実証主義批判の構図や、純粋に経験的な研究に収まりきること

のない社会学の構想を呈示しているという意味で、単なる理論的なパズル解きではありえない。それは当時の、そして現在の社会学の在り方に対する一つの挑戦なのであり、本来は社会学研究に携わる者なら誰もが受けて立たねばならないものであるはずだ。そしてこの問題意識は、近年日本で提唱されている「公共社会学」の構想とも軌を一にするものである（盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾編『公共社会学』1・2、東京大学出版会、2012；盛山和夫『社会学的方法的立場』東京大学出版会、2013）。

私自身のテキスト解読作業の成果は論文「システム合理性の公共社会学」（前出『公共社会学1』所収）で一応示したが、これはまったく萌芽的な水準に留まっており、今後も精緻なテキスト解読作業が必要とされる。特に、ルーマンの構想が先の目標設定に対してどこまで成功しえたのか、また「後期」の理論語彙においてもこの目標設定は有効なのかなど、非常に重要な論点であるにもかかわらずよくわかっていないことが多い。

4. おわりに

個人的なことだが昨年7月に情報学環に着任し、ようやく研究に集中できる環境が整った。この貴重な機会を十二分に活用し、（自分に

とつても社会学界にとつても）刺激的なルーマン学説研究を進めていきたいと思っている。



三谷 武司 (みにたに たけし)

[生年月] 1977年1月

[最終学歴] 東京大学大学院人文社会系研究科単位取得満期退学

[専門領域] 理論社会学・社会学史

[著書・論文]

ニクラス・ルーマン、高橋徹・赤堀三郎・阿南衆大・徳安彰・福井康太・三谷武司(訳)、2013、『社会構造とゼマンティック3』、法政大学出版局

三谷武司、2012、「システム合理性の公共社会学——ルーマン理論の規範性」、盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾(編)、『公共社会学1——リスク・市民社会・公共性』、東京大学出版会、71-86

三谷武司、2005、「システムが存立するとはいかなることか——ルーマン・システム理論の超越論的解釈に向けて」、『思想』970、113-129

[所属] 大学院情報学環

[所属学会] 日本社会学会、日本社会学理論学会